

2011年2月 アカデミックセミナー 要旨

設備投資研究所

講師：日本銀行・みずほ総研 小野有人氏

演題：“Differentiated Use of Small Business Credit Scoring by Relationship Lender and Transactional Lender: Evidence from the Firm-Bank Matched Data in Japan”

日時：2月17日(水) 15:30～17:30

要旨

金融機関の中小企業への融資判断の際には、大企業の場合と異なり貸し手が借り手の詳細な情報を入手しにくいことから銀行・企業間の長期的な信頼関係が伝統的に重視されてきた。しかしながら90年代後半以降、与えられた企業情報を基にして統計的な手法でスコアを算出しこれをもとに中小企業への融資判断を行う SBCS (small business credit scoring) という新しい手法が登場し、注目を集めている。SBCS には客観的な評価基準により融資判断が可能、適切なリスク評価が可能となることにより融資対象の裾野を広げることができるというメリットが考えられる一方、貸し手の事後的なデフォルト確率が増加する、銀行・企業間の信頼関係を希薄にさせるなどの可能性も指摘されている。総じて SBCS に関する研究はまだまだ発展途上であり、SBCS の効果に関するコンセンサスを得られていないのが現状といえる。本研究では経済産業研究所 (RIETI) の中小企業と銀行のマッチデータを用い、SBCS の (採用) 決定要因に関する様々な検証を行った。より具体的には、金融機関には企業と親密な関係を持っている relationship lender (RL) とそうではない transaction lender (TL) が存在しているとして、以下の7つの SBCS 採用に関する仮説を検証した。

第一は、SBCS 採用の動機について TL は審査コストの節約が目的である一方で RL は profitability の確保が主目的であるという仮説である。この仮説の根拠は例えば RL を地元地銀、TL を他の地域に拠点を持つ銀行とすると理解しやすいだろう。SBCS 採用の動機として、(その地域では) 脆弱なネットワークしか持たない TL は低コストでの顧客の拡大が目的である一方、RL は既存の顧客への貸出から得られる利益をできるだけ多くすることが目的であると考えられるからである。分析の結果、RL の profitability 動機は有意に観測されたが、TL のコスト削減動機は有意には観測されなかった。

第二は、企業は RL との親密度合いが小さいほど TL から SBCS ローンを受けているという仮説である。分析の結果 RL の貸出額と TL から SBCS ローンを受けているか否かには負の関係が有意に観測された。

第三は、大きい規模の金融機関ほど SBCS を採用しているという仮説である。この仮説の根拠は、規模の大きい銀行ほどローン担当者が持つ主観的な顧客企業の情報を共有す

ることが困難になり、共有の容易な SBCS を採用すると考えられるからである。分析の結果、資産規模を銀行の規模とした場合、TL において SBCS 採用との間に正の有意な関係が観測された。

第四は、SBCS は企業規模が小さいほど、もしくは企業情報が opaque であるほど採用されやすいという仮説である。企業規模を売上高、企業情報の opaqueness を企業年齢と定義して分析の結果、両者とも SBCS 採用との間に正の有意な関係が観測された。

第五は、リスクの高い企業ほど SBCS が採用されやすいという仮説である。この仮説の根拠は、SBCS が適切なリスク評価の指標として機能していればリスクの高い企業の融資判断には SBCS が用いられるからである。リスクを格付機関のスコアとして分析の結果、RL についてリスクの高さと SBCS 採用との間に正の有意な関係が観測された。

第六は、SBCS ローンを受けている企業ほど事後的な倒産確率が高いという仮説である。分析の結果、RL による SBCS ローンを受けている企業は倒産確率が低くなり、TL による SBCS ローンを受けている企業は倒産確率が高くなることがわかった。

第七は、SBCS は銀行・企業間の関係を悪化させるという仮説である。分析の結果、TL から SBCS ローンを受けている企業に対し RL は貸出態度を硬化させていることが観測され、本仮説が支持されることが示された。

以上